



瀬川 廣

第85号

平成26年
8月11日

仙台市小学校長会

発行者／針生 弘（会長） 責任者／榊井 裕（広報部長）

主張

決断の時

会長 針生 弘（泉松陵小学校）



震災から3年が経過し、多くの方々の努力によって復興は進みつつあるが、完全な復興までは更に長い年月が必要である。

一方、私たちの前には、教育委員会制度や給与負担等の指定都市への移譲をはじめとする国の教育改革があり、道徳の教科化や外国語活動の拡充強化、いじめや体罰の問題、学力向上に向けた取組などの様々な喫緊の教育課題への対応や、組織の活性化、教職員の資質・能力の向上、家庭や地域との連携など、学校の教育力を最大限に生かした学校経営が強く求められており、学校力・教師力の向上に向けた様々な取組をすべき時が来ている。

全国学力・学習状況調査において、秋田県は6年連続全国トップ級の成績であると報じられた。その要因として、少人数指導や家庭学習の習慣化などの一般的なものの他に、教員が学級づくりを全ての教育活動の基盤と捉え、子どもたちの自己肯定感の醸成に努めながら、普段から1時間1時間の授業を大切に扱っていることが背景にあるという話を聞いた。

教員が学習活動におけるルールを学級全体に浸透させたり、学習展開や板書、発問等を工夫したりすることは、授業を行うものとしては当然のことであり、何よりもこのことは、校長が決断し、学校が組織を挙げて授業づくりに取り組みながら、教員の意識改革と力量の向上に努めれば、どこの学校におい

ても実現が可能であることを意味している。教員が真摯に授業に向き合い、教員同士の磨き合いがなされれば、それはさらに効果的なものとなることは明白である。

校長は、一人一人の子どもによりよい成長のための学校経営を行い、子どもの心に温かく寄り添い、当たり前の事を当たり前に実践できる教員を育成する責務を担っている。

教頭初任の頃、校長から「学校に校長室がある理由は何か。」と問われたことがある。「接客や会議のためにあると思う。」と答えたが、「校長室は、校長が大事なことを判断し、一人で決断する場所だ。」という予期せぬ答えが返ってきたことを思い出す。学校には様々な職種の職員がいるが、校長は学校規模の大小にかかわらず絶対的に一人であり、学校の最高責任者として、教育活動の全てに責任を持たなければならない立場にある。

リーダー論を語る時、しばしば引用される海軍提督・山本五十六の有名な言葉に「やって見せて 言って聞かせて やらせてみて ほめてやらねば 人は動かず」があるが、国による教育改革や教育課題の山積する今、校長は目指す学校経営の実現に向け、リーダーシップを発揮し、自ら率先垂範しながら学校力・教師力向上のための様々な決断をしていかなければならない。

内 容

○主 張	1
○特集・復興「復興への新たな取組」	2
○学区紹介「地域とともに」	6

○提言「復興に向けた創造ある教育」	8
○退会者からのメッセージ	10
○編集後記	20

特集・復興

復興への新たな取組

震災を乗り越え新たな一歩を ～校舎跡地での全校遠足を通して～

中野小学校 三塚 修

1 はじめに

東日本大震災から4年目を迎えた。本校では、昨年10月「学校の今後の在り方」を考える臨時の保護者会が開催され、平成27年度で学校を閉じるという市教委案を受け入れる意向が示された。その後12月の定例教育委員会、今年3月の市議会での条例改正を経て平成28年3月末をもって中野小学校142年の歴史に幕を下ろすことが正式に決まった。

閉校後、子どもたちの家庭の多くは、代替地への移転、あるいは市の復興公営住宅へ転居することとなり、児童はそれぞれの転居先となる学校で新たなスタートを切ることになる。

2 2年後を見据えて

こうした学校の現状と今後児童が直面するであろう様々な課題を視野に入れ、学校としての残り2年間、子どもたちに「何を教え、伝えるべきか。」「そのための学校の最重点課題は何か。」を教職員で繰り返し議論してきた。その中においては、児童が新しい環境下にあっても自信を持って学校生活を送るための基礎学力や社会性、コミュニケーション能力の育成が最も重要であるとの認識で一致した。

しかし、同時に、教職員からは「もう一度震災前の活動を経験させたい。」「中野の地域、そして自然のすばらしさを味わわせたい。」「転校先で誇りを持って中野の良さを伝えられる子どもに育てたい。」などの意見が数多く出された。そこで、こうした子どもへの思いを全教職員で共有し、平成26年度より「震災を乗り越え たくましく生きる子どもの育成」を新たに重点事項に加え、2年後の子どもの姿を『ふるさと中野のすばらしさに気付き、未来に向けて思いを語り発信する子ども』として、閉校までの2年間、全学年が地域の歴史や自然、人と触れ合う活動を通して、目指す姿の具現化を図ることとした。

3 震災と向き合う

一方、これらの取組を進めていく上においては、必然的に児童が震災と向き合う場面が生じることから、それに耐えうるだけの心のケアが進んでいるかどうかを学校として慎重に判断する必要があった。

そこで、新学期早々に西原校舎跡地への全校遠足

を計画し、それに合わせて児童の心の状態を把握することとした。子どもによって震災経験や受け止め方が異なることから、児童への個別の聞き取り調査を実施し、あわせて学校便りによる保護者への趣旨説明、不安なことへの相談の機会設定という段階を踏み、PTA総会を保護者への最後の協力依頼の場とした。

昨年1月、卒業を目前にした6年生から「津波で流された学校周辺をみんなで歩きたい。」との声が上がリ、保護者の理解を得た上で、5・6年合同で解体後の校舎跡に足を運ぶ活動を2度行った。その時の児童の様子と事後の感想から、こうした取組への可能性を感じていたことも判断材料の一つとなった。

担任の聞き取りからは、遠足実施に不安を抱いている児童がいなかったこと、また、保護者からは学校の取組を後押しする声も聞かれたことなどから、当初の計画どおり4月30日に全校遠足を実施した。

当日は、校舎跡地からキリンビール工場まで縦割りグループで移動し、その後、体育館を借りて縦割りで遊び、帰校前には旧中野小の校舎跡（港公園）に立ち寄る活動も組み入れた。心配していた心理的な面から体調不良を訴える子もなく、「楽しかった。」「またみんなで歩きたい。」などの声が多く聞かれた。

4 おわりに

解体作業後、校舎跡地を訪れるのが初めてという子がほとんどで、全校遠足は子どもたちが震災と向き合い、『新たな一歩』を踏み出すきっかけとなった。

現在、蒲生干潟でのフィールドワークをはじめ、仮設住宅訪問、校舎跡地の清掃やプランター設置、他校との交流学习等、それぞれの学年における具体の活動プランを立て実践に取り組み始めた。

子どもたちの目標や集会活動の挨拶の中に、「いつか震災で受けた支援への恩返しをしたい。」「自分たちの力で地域の人を笑顔にしたい。」等、震災で受けた支援への感謝の言葉がよく聞かれる。中野小学校としての残り2年間、一人一人に故郷のすばらしさを存分に味わわせ、子どもたちの思いを実現できるよう、今後も教職員一丸となって支えていきたい。

特集・復興

復興への新たな取組

スマイルコットンプロジェクトの継続と地域への広がり

南小泉小学校 篠原 洋治

南小泉小学校の総合的な学習の時間は、地域を様々な視点で見つめながら見方や考え方を広げ、深める学習で、自分自身の生活の基盤である地域を見る目を育てることで、自己の生き方をも考えていく学習プログラムとして構成しています。地域を見つめる視点として、3年生は「身近な地域」、4年生は「福祉・生命・健康」、5年生は「環境」、6年生は「地域の歴史」を入り口にしています。最終学年である6年生は、生活科も含めた5年生までの様々な領域の学習経験や国際理解の視点での学習をも視野に入れ、まちづくり等を題材として、総合的にものごとを判断し、思考を深めることができるような学習として単元を構成しています。そして、今年度も総合的な学習の時間に震災からの復興に関して地域を見つめる視点を取り入れています。

スマイルコットンプロジェクトは、東日本大震災発災時に2年生だった子どもたちが3年生となり、編み物協会の支援事業を活用した指編みをしてエコたわしを製作したことからはじまりました。「自分たちにできること」は何かを考え、地域にあったJR南小泉の仮設住宅に住む方々にエコたわしをプレゼントしました。この仮設住宅に住んでいた方が津波被害に遭われた荒浜地区の方でした。この出会いがきっかけとなり、4年生の総合的な学習の時間に、「人と人のいのちのつながり」をテーマにして荒浜の方々と交流しながら学習に取り組みました。子どもたちは、荒浜での震災体験の話を聞き、命の尊さや支え合う人々のすばらしさ、そして故郷への思いの深さについて学びました。また、荒浜の方が地域の復興のために取り組んでいる「東北コットンプロジェクト」のことを知り、「ちょっとだけ力を貸してください。」との呼び掛けに応え、自分たちにできることとして、一人一鉢の綿の栽培やPTAとの協力による全校への綿の種配布や、荒浜の綿花畑の草取りにも取り組みました。そして、2月には、みんなで育て収穫した綿を荒浜の被災した方に手渡すことができました。次の年、5年生の総合的な学習の時間では、綿栽培の継続と同時に、住んでいる地域と荒浜の関わりについて環境や歴史的な背景などの視点も加えながら学習しました。テーマである「命の

つながり」について考えを深め、東日本大震災で被災した方との学習を通して、「いのち」「生きる」ことについて考えることができました。今の荒浜の様子や人々の願いについて話を聞いた子どもたちは、次のような話が印象に残ったようです。「草を抜くことは手作業である。」「人手不足のために綿の耕作面積を減らした。」「仮設住宅に移り、部屋にすることが多くなり、人との関わり合いが薄くなっている。」「今も故郷に戻りたいという思いを持ち続けている。」「多くの人に震災のことを忘れてほしくない。」など。子どもたちは、これらのことを「自分がすべきこと」として捉え、その後の活動に結び付けようと考えました。また草を取りながら、畑の中にあったがれきを発見し、「そこに住んでいた人々の日常」への思いや荒浜を離れて生活している人々への思いに気付くことができたようです。さらに、実際の畑での草取りを通して作業の大変さやそれを続けている人々を敬う気持ちが育ちました。そして、荒浜の震災と被災した方々について学習したことを基に、荒浜の復興に向けて、自分ができることやすべきことについて考え、総合的な学習の時間のまとめとして発信することができました。

6年生になり、6月に、あらためて荒浜の方々から話をうかがいました。今年も、一人一鉢、綿の種を植えました。2年前、震災体験のお話を聞いたことが基となり、復興のシンボルでもある「綿づくり」は、後輩たちに受け継がれています。そして、南小泉の地域に広がりを見せています。子どもたちが、人と人のつながりを実感し、この学習を継続していくことは、震災や被災した方々を忘れずに、これからの自分たちの生き方を考えていくことにつながっていきます。

本年度も、荒浜の水田での稲作が始まり、昨年度より綿花の畑は小さくなったそうです。やがて、見渡す限りの水田が広がり、米作りに邁進する荒浜の方々の姿が見られることと思います。「人と人のいのちのつながり」を学び、大きく成長した子どもたちが復興を遂げた荒浜地区を眺めている姿を想像しています。

特集・復興

復興への新たな取組

震災からの復興 「校木 けやき」は地域のシンボル

南光台小学校 丹野 富雄

1 新校舎建設に向けて

南光台小学校にとって平成25年度は、「東日本大震災からの復興元年」の年でした。震災で大きな被害を受けた校舎の解体工事が7月から本格的に始まりました。

南光台小学校は、地域の方々の熱い思いを資源として、これを大いに取り入れ、学校と保護者、地域の方々がともに手を携えて、児童の教育活動を積極的に推し進めてきました。



(震災前の校舎と校木けやき)

2 仮設校舎での教育活動

南光台小学校区の地域住民の方々は、学校に対する愛着に極めて熱いものがあります。

(1) 協働型学校評価を有効に活用する取組

平成25年度、26年度の重点目標は、①進んで挨拶ができるようにする。②進んで学習ができるようにする。の二つです。これは、本校と南光台中学校共通の目標です。小・中が同じ目標を設定し、保護者と地域住民の協力のもと、9年間を見通した児童・生徒の育みを目指しています。

(2) 南光台中学校との連携の強化

その一つとして、毎年秋に行われている仙台市小学校陸上記録会の練習への取組があります。南光台中学校の陸上部の生徒や教職員からも指導を受けています。6年生の児童にとっては、中学校の様子や雰囲気を直接感じることでできる貴重な体験になっています。さらに、この取組は、中1ギャップの解消にも大いに役立っています。

(3) 地域との連携事業の推進

①毎朝、そして下校時には、町内の辻々に学校ポ

ランティア防犯巡視員の方々が立ち、児童の登下校を見守っていただいています。子どもたちと町内の安心・安全確保に地域を挙げて取り組んでいます。

②本校の教育活動において、様々な分野でゲストティーチャー等の教育支援をしてもらっています。

③本校のPTAは、学校教育を補完する活動にも取り組んでいます。毎年開催しているPTAフェスティバルは、児童、保護者、教職員そして地域を巻き込んだイベントになっています。

(4) 地域防災計画の具現化

小学校、中学校そして地域が一体となって総合的な地域防災計画の具現化を推進しています。

3 校木「けやき」は地域のシンボル

被災した校舎の解体工事を行うに当たり、校舎正面にある校木「けやき」を撤去するか否かの意見をPTAから聴取しました。存続を望む声が圧倒的に多く寄せられました。中には、「校舎が解体され更地になるだけでも悲しい気持ちになる。更地の真ん中に凛として立つ校木『けやき』を毎日見上げることで勇気と希望がわいてくる。」という意見もありました。至極ごもっともな意見です。校木「けやき」は、南光台小学校に学んだ人々、学んでいる子どもたち、これから学ぼうとしている人たち、そして地域の方々のよりどころなのです。

このような思いを柱にして、南光台小学校の震災からの復興は現在着々と進行中です。平成27年度に完成するであろう新校舎に思いをはせ、職員一同平常心を心掛けながら、一日一日の教育活動を充実したものにしていくことに全力を傾けていきたいと考えています。



(新校舎と校木けやきのイメージ図)

特集・復興

復興への新たな取組

被災校と共に歩む学校経営

東宮城野小学校 鈴木 秀男

1 はじめに

荒浜小学校との共同生活も 4 年目を迎えた。荒浜小学校は、平成28年度から七郷小学校と統合する予定であり、一緒に生活するのも残り 2 年となる。

1 年目（平成23年度）は、荒浜小学校の子どもたちが安心して学校生活を送れるようにすることと、両校の子ども同士が顔見知りになることを、2 年目（平成24年度）は、両校の子どもたちが互いに認め合える関係づくりをねらいとして教育活動を展開した。そして、3 年目（平成25年度）は互いの連携・交流がより一層深まり、広がりを見せた。

2 平成25年度の学校経営・実践の実際

(1) 学校行事における連携・交流

- ① 交通安全教室（4 月）や防犯教室（5 月）
仙台東警察署生活安全課警察官による講話

② 野外活動（5 月 6 日、7 日）

荒浜小学校の 4 年生・5 年生と東宮城野小学校の 5 年生が泉岳少年自然の家で 1 泊 2 日の活動を行った。1 日目は泉ヶ岳登山、キャンプファイヤー、2 日目は野外炊飯を行った。

③ 修学旅行（6 月 11 日、12 日）

会津若松・猪苗代方面へ行った。自主研修では、2 校混合の活動グループを編成し、協力しながら体験活動や見学、買い物等を行った。

④ 避難訓練（地震、火災）、不審者対応訓練（年 4 回：6 月に 2 回、9 月、11 月）

⑤ 陸上記録会（9 月）

両校の教員が種目を分担して効果的な指導を行った。大会当日も協力して応援やウォーミングアップを行い、心のつながりが深まった。

(2) 学習における連携・交流



① 授業の実際（合同授業・校外学習）

- 1 年生 生活科「公園での生き物探し」
「昔の遊び」、体育「泉ヶ岳雪遊び」等

○2 年生 生活科「まちたんけん」等

2 校混合グループでのお店訪問・発表会

○3 年生 社会科「学区探検」「かまぼこ工場見学」「歴史民俗資料館見学」等

○4 年生 社会科「消防署見学」「浄水場見学」「清掃工場見学」、理科「月や星の動き（天文台見学）」、総合的な学習の時間「卸町のひみつを探ろう」等

○5 年生 荒浜小学校の 5 年生は 3 名と少ないので、音楽と家庭科、体育は合同授業を行った。国語での発表や討論形式の学習、理科「流れる水の働き」、総合的な学習の時間「森林の働きについて調べる」等

○6 年生 国語での発表や討論形式の学習、社会「縄文の森見学」、理科「大地の作りと変化」「天文台見学」「電気の利用とわたしたちの生活」等

② 連携・交流の成果

東宮城野小学校の若い教員にとっては、交流がベテラン教員からの学びの場(OJT)になっており、荒浜小学校の教員や子どもたちにとっては、少人数にはない学習経験ができる。

(3) 児童会・委員会・クラブ活動での交流

① 東荒まつり（7 月）

東宮城野小は、縦割りグループごとに八つの店を出して、荒浜小は児童が三つ、職員が一つ、荒浜の地域の方々が一つの計五つの店を出して、遊びながら交流を深めた。

② 委員会活動、クラブ活動、縦割り遊び

四つの委員会と六つのクラブで活動を共にした。10 月から業間縦割り遊びを一緒に行った。

3 おわりに

これまで互いの独自性を尊重しながら、教育活動や授業形態等を工夫し、子どもたちの交流に重点を置いて連携を深めてきた。今年度は、合同で教材研究やカリキュラム検討、授業等を行い、教職員同士の連携を強化し、より質の高い教育を目指している。

学区紹介 地域とともに

地域を見つめ直して

坪沼小学校 成瀬 秀治

坪沼小学校は、明治6年に熊野堂小学校坪沼支校として開校以来、この地域の子どもたちの学びの場として、地域コミュニティの核として歴史を刻んできました。しかし、児童数の大幅な減少により、平成27年4月から生出小学校との統合が決定しました。統合は、地域にとって苦渋の選択であり、その寂しさは、筆舌に尽くしがたいものがあります。子どもたちは、統合により学びの場は変わりますが、この地域で生活し、将来を支える掛け替えのない存在であることに変わりはありません。

そこで、統合前に自分たちの地域の良さを見直そうと、総合的な学習の時間に地域について調べる活動に取り組んでいます。昨年度は、「坪沼の名人に学ぼう」をテーマに、名人たるゆえんを調べると共に、名人からその技を教えてもらい実際に体験しました。「縄ない名人」は、昔からこの地域の稲藁わらを活用して、縄だけでなく各家庭や坪沼神社のお正月用

のしめ縄を作ってきました。子どもたちは、しめ縄の種類、材料、作り方などを事前に調べ、分からないことは名人にインタビューして課題を解決しました。活動の最後は、実際に名人や老人クラブの方々に来てもらい、輪飾りとごぼう締めごぼうしめの2種類のしめ縄作りに挑戦しました。その他に「竹細工名人」「野菜作り名人」「篠笛名人」「油揚げ作り名人」等からこの坪沼地域の特色や伝統的に伝えられてきた技術の一端を学びました。学習のまとめは、感謝の会として名人や地域の方々を招いて調べたことを発表しました。今年度は、坪沼の歴史や地域の方々の生き方にスポットをあてて学習を進めているところです。

子どもたちは、祭り囃子はやしや地域の祭りへの参加、米や野菜作りをとおして、すでに地域の伝統の継承者としての一翼を担っています。学習を通して、あらためてこの坪沼の地域の良さを発見し、そこで暮らし伝統を守っている名人の技のすばらしさに触れることができました。また、地域の方々と関わることで、自分たちが地域の一員であり、一人一人が地域にとって大切な存在であることを実感できたようです。

学区紹介 地域とともに

つなげよう！あいさつの輪

川平小学校 葛西 雄二

川平小学校は、昭和54年中山小学校から独立し、児童数582名15学級で開校しました。平成12年度には、空き教室（3教室）を利用して、マイスクール川平が開設され、川平マイスクール児童館も併設されています。

本校の学区は二つの中学校区にまたがっており、卒業生は、中山中学校と桜丘中学校にほぼ半数ずつ進学します。二つの中学校区には、本校、中山小学校と桜丘小学校の三つの小学校があります。

桜丘中・桜丘小・川平小は、平成23年度に「中学校区・学びの連携モデル事業」の指定を受け、小中の連携と交流を深めてきました。その中で、川平小が含まれるもう一つの中学校区である中山中学区の学校とも連携の輪を広げようということで、5校連絡会（懇親会）を平成24年から行っています。

「何か5校で一緒にできることがあるといいね。」という発案があり、5校とも協働型学校評価の重点目標に「あいさつ」の項目があることから、「小・中学校合同あいさつ運動」に取り組むことが決まり

ました。今年度は、まず2回、5月と12月の「子どもを守ろうデー」に実施することにし、小・中学生が一緒に、そして保護者や地域の方々も交えて行うことを目標にしました。



川平学区連合町内会や各町内会、そしてマイスクール川平では、小学校共催の学区民体育祭を始めとして、夏祭り、キャンプやフェスティバル等、子どもたちが親子で参加したり、地域の人たちと触れ合える楽しい活動の場を作っています。住みよい町づくりと健やかな子どもたちの成長のために尽力してくださる方がたくさんいます。同様に、中山学区も桜丘学区も、地域と学校の結び付きが強く、学校の大きな支えとなっています。

そんなすばらしい地域に住んでいることへの感謝の気持ちを、明るい挨拶で表現して伝えていきたいと思っています。また、中学生や地域の人とのつながりを、挨拶から広げ・深め、地域の一員としての自覚や愛着心の向上につなげたいと考えています。



学区紹介 地域とともに

地域人としての人の輪づくり

実沢小学校 高砂 淳子

本校は140年の歴史をもつ伝統校です。田畑が多く残る自然豊かな環境の中、代々の土地を引き継ぎ、ふるさとを大切に守る地域の方々に温かく見守られながら子どもたちは素直に育っています。

この実沢のよさを理解し、ふるさとを愛する心を育てたいと考え、本校では「ふるさと教育」に力を入れています。特に、自分たちで作物を育て、収穫し、加工や調理をして食べるという昔ながらの「食文化」を体験を通して学んでいます。

5年生は、学校裏の田んぼで餅米を育てます。田おこしから水入れ、代かき、肥料や除草剤の散布などの一連の流れを間近で見ながら学習します。千歯こき、唐箕^{とうみ}など昔の人々の苦労が伝わる手作業での脱穀も行います。本校ならではの体験です。その中で、田植えと稲刈りだけは、全校児童、保護者、地域の方々が一丸となって行います。春と秋の一大イベントです。収穫した餅米は、秋の「実小まつり」で餅つきをして、お世話になった保護者や地域の

方々に振る舞います。もちろん杵と臼も登場します。昨年は約500kg という大豊作でした。

6年生はうどん作り、3年生は豆腐作りに挑戦します。5年生の秋に植えた麦は、子どもたちが6年生になる頃には大きく生長し、穂を出します。穂が金色になったら刈り取り、乾燥、脱穀、粉ひきと続き、12月のうどん作りを迎えます。種蒔きから1年以上もの行程を経て食べる手作りうどんの味は格別です。3年生は、自分たちで育てた大豆で豆腐を作ります。

最後の段階である加工や調理は、親子一緒に楽しみながら行いますが、種蒔きからスタートする活動の多くは、「地域の先生」の支援によって成り立っています。実沢の自然を糧に生きている人々が発する言葉には力があります。心強い応援団です。今、様々な学校行事で子どもたちが披露する伝統芸能「大正踊り」が20年前に復活したのも、地域の方々の熱い思いがあったからでしょう。児童数の減少により、持続していく上での課題も生じていますが、栽培活動の域を超え、実沢の自然や歴史、文化を学ぶことにつながるこれらの学習活動を今後も大切にしていきたいと考えます。

学区紹介 地域とともに

学校・家庭・地域の防災力向上を目指して

東四郎丸小学校 小澤 守一

本校学区は、北側は名取川、南東側は名取市閑上地区に接し、東日本大震災時には、学区内まで津波が到達した地域です。学校への被害はなかったものの、閑上地区や地域の住民が多数避難してきました。

地域としての防災の意識は高く、昨年度、本校で実施された仙台市総合防災訓練は、地域主導で行われ、児童や地域住民約800名が避難訓練に参加しました。地域防災マニュアルも、現実に活用できるものにするために、定期的に地域の方、学校職員、関係機関が集まり、見直しを図っています。

今年度の訓練は、地域の担当者の方や関係機関のご協力を得ながらも学校主導の訓練とし、防災について親子で考えてもらいたい、意識を高めてもらいたいということをねらいとしています。忙しくて、平日にはなかなか学校に来ることができない保護者も多いため、できるだけたくさんの保護者に参加してもらえるよう土曜日に実施することにしました。

訓練当日は、1時間目に児童のみ対象の地震・津波対応避難訓練、2～3時間目に地域の方々や関係機関のご協力をいただき児童・保護者で親子防災教室を、4時間目に児童引き渡し訓練を行います。

親子防災教室では、児童・保護者が一緒に1～4年生は消火訓練・濃煙体験・通報訓練・起震車体験、5年生は「そなえゲーム」、6年生は応急処置体験・炊出し訓練に参加します。「そなえゲーム」とは、プレイヤーが架空の地域（東中田地区がモデルとなっています）の住民になって、災害に備えるために自分や地域に何が必要か、何ができるかについて考えながら実践的に学ぶことができる参加型ボードゲームです。震災後、本校学区のある東中田地区から生まれたゲームで、来年3月に仙台市で開催される国連防災世界会議において各国の代表の皆様を紹介される予定です。この親子防災教室では、地域の方々にサポートしていただきながら、未曾有の震災経験から浮かび上がってきた課題である「日頃からの備え（自助）」と「人のつながり（共助）」について親子で考え、児童・保護者の防災に対しての意識を高めたいと考えています。

提言

復興に向けた創造ある教育

「教育は人なり」～教員の指導力向上を目指して～

仙台市小学校教育研究会 会長 三嶋 廣志（宮城野小学校）

児童生徒に育みたい力として、仙台市教育振興基本計画では、「時代の変化を受けとめ、未来を切り開いていく力」を掲げている。仙小教研では、その具現化を担う教員の指導力向上を目指し、以下の取組から推進していく。

1 防災教育の質の高まりに向けて

仙台市小学校教育課程研究協議会の生活・総合的な学習部会では、あの東日本大震災を踏まえ、昨年度は七郷小の防災教育実践に学び、今年度は北六番丁小の防災教育実践に学びながら、新たな防災教育の在り方に迫っていく。地域や児童の実態を踏まえ、自校の全体計画や年間指導計画づくりに役立つ研修の一助になればと考えている。

特に、今年度は、仙台市内で「国連防災世界会議」が開催される。これを契機に、仙台市の防災教育が、質的により高まるよう支援していきたい。

2 宮連小外国語活動部会の新設に向けて

外国語活動部会では、宮城県内の小中学校とのネットワーク化を図り、「宮城県外国語活動教育研究協議会（仮称）」を設け、県内の学校間連携

を通して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする子どもの育成を具現化していく。また、平成27年2月20日（金）には、文部科学省から調査官を招いて、授業研究及び講演会を開催し、指導方法の工夫・改善などを図っていく。次年度には、仙台市で全国大会を開催する予定である。

3 実りある小中合同講演会に向けて

2年ごとに実施してきた仙小教研・仙中教研の合同講演会は、平成26年8月19日（火）に宮城教弘塾との共催で開催されることとなった。宮城教弘塾担当の方々は、常に教育における「不易と流行」をしっかりと見極め、教育に携わる者の使命感、教育愛、専門的な力量の向上を図るよう努めている。各学校では、この講演会を現職教育の場にするなど、多くの教員の研修の機会になるよう御配慮をよろしくお願いしたい。

「教育は人なり」。仙小教研では、各部会や関係機関との連携・協力をより一層密にし、教員の指導力向上を目指していきたい。

提言

復興に向けた創造ある教育

「地域とともに歩む学校」の推進―「新たな防災教育」発信に工夫を―

2地区会長 今野 俊男（八幡小学校）

現任校での新たな防災教育の取組について、昨年度も「廣瀬川」への掲載の機会をいただいた。震災の教訓を風化させず今後確実ににつないでいくために具体的かつ継続的な指導や訓練を行っていかねばならないと考えている。そこで、本年度は、昨年度の実践を振り返り、教職員、児童、保護者の意識化を図るため、また地域とのつながりを深めるために、計画と活動がより見える形となるよう進めていくことにした。

まず、これまで12月に実施していた土曜学校公開日を1日増やし、6月にも実施することにした。公開する内容を、協働型目標に関連させた授業、防災副読本を活用した授業、避難訓練と押さえた。併せて、引き渡し訓練を実施することとし、公開日の前日、授業内容の紹介に添えて、引き渡し基準表、避難経路図等を資料として保護者に配布するようにした。また、公開授業の中で、各担任から保護者に対して、家庭ごとに震災時の対応の確認をしていただくよう依頼することにした。当日は雨模様の天気と

なり、急きょ引き渡し場所を教室に変更したが、ほぼねらいどおりに実施することができたと受け止めている。「子どもだけで留守番中に地震が発生した場合の確認を家族で改めてしました。」という声等が多数の保護者の方から寄せられた。次年度以降、例えば、「地震」以外の災害を取り上げたり、訓練の想定を変えたりして、今後確実につなげていきたい。

次に、地域代表の方々と協議を重ねて作成した「地域版避難所運営マニュアル」に則った避難所開設訓練を、連合町内会、第一中学校と合同で実施することにした。現在、7月26日（土）の実施に向けて三者で最終調整を行っている。小中が連携して臨むことで、学校への地域の方々の信頼がより深まればと思っている。本校では、設置2年目を迎える「学校支援地域本部」による教育活動支援が活発化している。学年ごとに一人配置した地域連携担当教員を核として、全担任と、地域の方々と関わる機会が増えてきている。「地域とともに歩む学校」をさらに推進していくチャンスと捉えている。

提言

復興に向けた創造ある教育

学び合い、高め合う教職員の育成

4地区会長 飯塚 巖（桂小学校）

東日本大震災から3年が経過し、仙台市全体としては、震災からの復興はかなり進んでいるものと捉えられている。しかし、沿岸部の様相はまだまだ年月を要するようだ。特に、津波被災校区は、復興が難しかったり遅れたりして、閉校が決定した学校もある。各学校の課題は地域の実態により差異はあるが、震災による影響はあまりにも大きすぎる。

そのような中、校長は学校の経営者としてのリーダーシップ、総合的なマネジメント力が求められる。千葉大学教授天笠茂氏は、そのために必要な力量を①学校のビジョンを構築し、目標を提示する力②授業を中心に学校の教育活動について改善を図る力③ミドル層の形成など組織する力、教職員を育てる力④保護者、地域の人々と連携を図る力の4点をあげている。私は、取り分け大切なのは②と③、学校経営への参画意識を持ち、授業力の向上を目指し学び続ける教職員を育てることと思っている。

社会の急速な進展など児童を取り巻く環境も変容している。そのような社会を生き抜く力を育むため

には、教職員が日々の教育活動に対する振り返りと改善を図る取組が不断に行われることが必要と考えている。このことは、教職員の授業研究を積み重ねることで互いに学び合い、鍛え合い、高め合い、実践的指導力、授業力の向上へとつながる。この前進する教職員による指導で、未来を担う児童に確かな学力、豊かな心、健やかな体のバランスのとれた生きる力を育むことができるものと考えている。

数年前、私たちも担任をして児童と向き合ってきたことを忘れないことも肝要である。若い頃教えていただいた授業研究、教材研究の取組、検討会での数々の指導助言。そのときには真しに討論する教職員集団がいた。そこでの学び、所属感、充実感等が今日の自分を支えているのだと思う。

校長として、経営基盤となる教職員の育成のため、日々の教育活動と学校・学級事務に追われ多忙感を抱き、能力、意欲に差のある教職員を、授業研究を行わせ、振り返りと改善を図り、内省し自己変革に向かわせ授業力が向上するよう奮闘している。

提言

復興に向けた創造ある教育

「防災安全科」で育む子どもたち

6地区会長 山崎 茂（七郷小学校）

震災から4年目を迎えた今年度も、市教委が実施している「心とからだの健康調査」を、全児童を対象に行った。小学校在学中に震災に遭った子どもたちは、すでに5、6年生だけになった。昨年度、ハイリスクと診断された児童を中心に、今年度の回答用紙を読んでもみると、少しずつではあるが回復の兆しが見られたように思う。特に、高学年の児童においては、将来に向かって頑張ろうという前向きな気持ちを表している児童が多く見られた。

昨年度に受けた「研究開発学校」の指定が2年目を迎えた。6月に、今年度第1回目の運営指導委員会を行った。有識者、市教委、近隣の小中学校の校長等で構成する委員会である。これまでの取組や今後の方向性に対して指導を受けた。会の前には、三つの学年が授業を行い、運営指導員から指導助言をいただいた。

前例がなく、手探り状態で研究を進めているので難しいことだらけだが、新しいものを創り出すという楽しさもある。また、今年度は研究授業が中心になるので、昨年度よりは楽しく研究が進められそう

である。

地下鉄東西線の開業、土地区画整理事業、復興住宅の建設など、田園地帯だった七郷地区が、急速に都市化していく。便利になることもあるが、失われていくものも少なくない。そのような中、子どもたちは総合的な学習の時間や生活科を中心に、地域の住民に協力をもらいながら七郷を知る学習、七郷を住みよいまちにする学習に取り組んでいる。それと同時に「防災安全科」の授業を通して、安全・安心なまちの在り方についての知識、もしもの時に自分の命を守る自助の力、さらに他と協力し合う共助の力を身に付ける学習に取り組んでいる。

あと数年で、小学校の中に東日本大震災を経験した児童がいなくなる。「防災安全科」が果たす役割が大きくなる。今、七郷小で学んだ子どもたちが、将来、七郷地区の防災・安全のために、中心的役割を担ってほしいと心から願っている。さらに、被災地仙台的な全ての子どもたちが、自らの経験を生かして、これから共に生きる日本全国の仲間たちへの情報の発信源となれるように導いていきたいものである。

退会者からのメッセージ

後 輩 に 期 待 す る こ と



地域の絆に生かされて

村山 和枝（前 向山小学校）

新年度がスタートして3か月余り、校長先生方におかれましては、新たな学校目標の具現化に向け日々御活躍のことと存じます。学校を離れこれまでの校長職時代を振り返りながら、し残したことがまだまだあったなと後悔することしきりですが、今となっては現役の校長先生方の御活躍に御期待申し上げるのみです。

かくいう私もほんの1, 2か月前までは、自分がこれまで積み上げてきたものが、第二の職場では何も生かされないのではと、正直落胆しておりました。そのような折、区内のボランティア団体の会議で、5年前“学校支援地域本部”を立ち上げた際に中心となって活躍してくださった地域の方々と再会し、新たな出会いを互いに喜び合いました。現在は、在職中私を支えてくださった地域の方々との新たなステージでの出会いが、今の私を支えてくれようとしています。このことがあってから、あの震災の際、避難所運営で苦楽を共にし、掛け替えのない存在となった地域の方々が職場に立ち寄られることが続き、皆さんがお年を召されてもなお、地域の為に活躍されている様子に元気付けられました。

地域の教育力を学校教育に生かすことができたから、そして地域の方々が得意分野を生かし子どもと触れ合うことで、自己有用感や生きがいを感じていただけたら、という思いから、校長時代は“学校支援地域本部事業”を学区内に定着させていくことに力を入れてきました。その中で、地域の方々との様々な心の交流や絆が生まれ、私自身一人の人間として多くの事を学ぶ機会を得ました。正に、地域を育てていこうなどという大それた考えを持った自分

が恥ずかしく思える程、私自身が育てていただきました。

そして、教職を辞して第二の人生を歩もうとしている今、戸惑いを感じている私を支えてくださったのは、やはり校長時代お世話になった地域の皆様であったことに、人と人とがつながり合うことのすばらしさや醍醐味を感じざるを得ません。人と人とのつながりによって自分は生かされている。そのことを実感できた三十数年の私の教職人生は、幸せであったと改めて感じている次第です。

校長先生方が健康に留意され、充実した日々を過ごされますことを御祈念いたしております。

地域と共に

菅原 一郎（前 生出小学校）

3月31日、38年間の教職生活を終えてほっとする間もなく、4月1日から新しい職場での仕事がスタートしました。早いものでそれから3か月が過ぎようとしています。

教職の最後、校長として勤務した生出小学校では、本当に充実した楽しい日々を送ることができました。

児童80名の小規模校ですが、赤石分校を抱え、小学校の中に幼児学園（幼稚園）があり、他の小学校では経験のできない貴重な経験をさせていただきました。

子どもたちに支えられ、職員に支えられ、そして保護者や地域の方々に支えられて何とか学校経営を進めていくことができた気がします。特に職員一人一人が能力を十分に発揮し、それが学校全体の力になって学校づくりができたことが何よりでした。職

員が意欲的に取り組み、より高い目標を掲げて実践をしていくことは、子どもたちに力をつけ、能力を伸ばすことに直結しています。ここを学校経営の基盤と考え、職員全員と一緒に力を合わせて教育活動に取り組んでくることができました。

教育現場を離れ、児童センターで仕事をしてみると、改めて学校の役割、児童センターの存在等を考えさせられます。学校と共通している点は、児童センターも「地域と共にある」ということです。地域の子育て支援という大きな役割を担っていますが、しっかりと地域に根ざし、地域との連携を大切にしながらその存在をしっかりと示していこうと思います。

仙台市小学校長会の皆様には、本当にお世話になりました。無事に学校経営を進めることができたのは、校長会の先生方の温かい御助言・御指導、そして力強いチームワークに支えられたお陰と深く感謝しております。ありがとうございました。

明日登る山も見定め いま終わる一つのこと

熊谷 和彦（前 木町通小学校）

一つの茶碗がある。教職に就いて以来37年間、学校で使い続けてきた茶碗である。壊れもせず欠けることもなく、私と朝夕のわずかな時間を毎日共にしてきた。喜びも苦悩も共有してきたその茶碗で小学校生活最後の茶を飲んでいた時、ふと斎藤喜博作の「一つのこと」が心をよぎった。

いま終わる 一つのこと

いま越える 一つの山

風わたる 草原

ひびきあう 心の歌

桑の海 光る雲

人は続き 道は続く

遠い道 はるかな道

明日登る 山も見定め

いま終わる 一つのこと

この度の退職は、一つの山越えに例えることができるのかもしれない。連なる山並みをチームを組みながら一つ一つ縦走踏破してきた中に自分がいた。汗を流し、疲れた体にむち打って皆と共に頂に立つ喜びは格別なものがあった。しかし、ふと顔を上げれば、かなたにより高くより美しい山が常にそびえていた。よし、明日はあの山に挑戦しようと、新たな意欲が湧いてくるのを覚える一瞬であったと今改めて思う。

縁あって、四月から大学生に関わる仕事に就いた。私にとっての明日登る山である。未来ある子どもを指導する教員の卵である彼らに、自分の培ってきたわずかばかりのことが役立てられればと考えている。難しい仕事であることは承知している。

道は遠く山ははるかであるが、明日登る山を見定めつつ、急がずあせらず、また一步一步着実に地を踏みしめて前進していこうと考えながら、ひと時の一服茶を飲み終えた。

最後に、仙台市小学校長会への感謝・御礼とともにますますの御発展、会員の皆様の御健勝・御活躍を心よりお祈りしたい。

東日本大震災から学ぶ ～先見性と経験知～

菅野 正彦（前 上杉山通小学校）

諸先輩や同僚の方々の御支援、御協力により、38年間の教職を全うすることができました。感謝申し上げます。

校長6年間での大きな出来事は、やはり東日本大震災でした。30年以内に大地震が起きるということで、地域の方々との話し合いや、マニュアルの整備、避難訓練などを重ねてきました。しかし、東日本大震災の時は、瞬時に判断し、対策を取らなければならず、当然マニュアルどおりには行きませんでしたし、余裕もありませんでした。

子どもたちを机の下に潜らせ安全を守ること、引き渡し簿で保護者に引き渡すことについては、訓練が活かされ、実施することができました。一人のけ

が人もなく保護者に確実に引き渡すことができたのは、全職員の判断と行動力に帰するところがあると感謝しております。

しかし、次々と体育館に避難してくる地域の方々への対応は、臨機応変に対応せざるを得ませんでした。体育館にマットを敷き、ブルーシートを出して休んでもらい、引き渡しに携わっていない職員で、簡易トイレを組み立て、水や食料を配布しました。

最初の 2 日間は職員がお世話し、その後は避難者の自主運営に移行し、校長と教頭で対応しました。避難所運営は初めてのことであり、その組織作り・運営は、今思い出しますと、まさに野外活動の取組と重なります。常日頃の教育活動、学校行事に対する取組の経験が生かされました。

避難所運営には、町内会や体育振興会、PTA・社会学級の協力も絶大なものがありました。学校は、常に地域の諸団体やPTAと連携を深めておくことが大切であることを知らされました。

東日本大震災から学んだことは、事が重大な時ほど、校長のリーダーシップが大事だということです。瞬時に状況を判断し、あらゆる視点で指示を出し、子どもや職員、そして避難者を守り、これからの進む道を示さなければなりません。また、課題や問題に対して準備をしておく先見性を持つこと、そして、課題・問題が発生したときにこれまでの経験を生かして対応できる経験知を持つことです。心の持ち方一つで、物事は好転してきます。常に前を向き、大きな流れをつかみ、事に当たってください。

今後益々困難になってくる学校運営に対し、積極的に取り組み、子どもたちの笑顔あふれる学校を作ってください。

「ものづくり」の楽しさを 子どもたちに

石垣 富一郎（前 通町小学校）

4 月 1 日 8 時 30 分、前日まで 38 年間過ごした教員生活にピリオドを打った余韻に浸る間もなく、新たな職場での辞令交付式に臨みました。いただいた職名は通称サイエンスコーディネーター、自己紹介の折には 3 か月を過ぎようとしている今現在も言いよ

どむ自分がいます。

さて、少子高齢化の急速な進展は日本の将来に危機的な影響を与えることが懸念されていることは周知の事実ですが、東京オリンピックが開催される 2020 年の 14 歳以下の推定人口は、現在に比して 1 割弱の減少、30 年には 4 分の 3 程度になると見込まれています。このことは、当然就労人口も減少し、日本の経済や産業を支える人材の確保もままならなくなることを意味しています。特に科学技術に関わる人材の確保については、子どもたちの「理科離れ」の影響もあり、なおのこと、その危機感を強めている現状があります。この改善に向け、教育施策面でも充実が図られ、学校でも理科の面白さを実感させるべく多くの創造的な実践がなされています。

子どもたちに実験や観察という体験を通して理科や自然現象に関して知的好奇心を醸成させ、将来の科学技術や工業を支える人材を育成する。誇大に言えばその一端の、そのまた一端の……と限りなく続く端っこで、私も 4 月から新しいステージの歩みを遅々と進めています。

仙台市が進めているスチューデントシティ・ファイナンスパークが、体験を通し社会や経済の仕組みを学ぶ場であることに対して、同じく中東カタールの復興支援の採択を受け、7 月末にキックオフを迎える「東北大学・カタールサイエンスキャンパス」は、大学の研究者や企業の持つノウハウを生かして、子どもたちが生産活動の仕組みを見学・体験したり、ものづくりの楽しさを味わったりする場となります。

学校ではなかなかできないような実験やものづくりに触れる機会をできるだけ多く提供して、子どもたちの歓声を聴きたい、輝く顔を見たい。そのプロジェクトがスタートする夏休みももうすぐ始まります。

子どもたちと再び一緒に活動できることを待ち遠しく感じながら、これまでの教員としての長い経験を新たなステージで活かしたいと思い、プロジェクトの計画を進める日々を過ごしています。



子どもに生きる力を育む地域力

西嶋 茂雄（前 虹の丘小学校）

地域と学校との融合は、子どもたちの心に響く教育力を内包している。故郷復興プロジェクトの一環として、地域の方30名をお招きし、全クラス一斉特別授業を展開した時である。その中には、87歳の高齢者の姿もあった。

特別授業を受けた子どもたちは、次のような感想を述べていた。

- ・夢を持つことの大切さを聞いて、自分なりにしっかりと夢を持ちたいと思った。
- ・未来に向かって力強く生きていくことが大切であるという話を聞いて感動した。
- ・教室で授業をしてもらうことによって、地域の方を身近に感じる事ができた。
- ・昔の話を聞くことによって、今の自分たちの暮らしが豊かで恵まれていることに気付いた。
- ・戦争体験を聞いて、命の大切さを強く感じた。
- ・食料不足の生活の様子を聞いて、食べ物大切さを改めて感じた。

こうした子どもたちの声は、経験・実績・識見に優れた地域の方の体験に基づく授業が、いかに子どもたちの心に響いているかを如実に物語っている。

現在、「コミュニケーション能力の低下」が大きな社会問題になってきている。特に、情報ツールに依存するあまり、メタコミュニケーション能力が確実に低下していると言っても過言ではない。また、学力向上が至上命題になるあまり、目先の平均点に一喜一憂し、「夢と希望のグランドデザイン」を描くことを忘れがちになってはいないかと危惧している。それは、学力の高い国ほど自殺率も高いという現実が暗に示唆している。

高度な情報化社会の一途をたどる今日の日本の社会的状況を鑑みるならば、地域の方々と直接触れ合うことが、「コミュニケーション能力」及び「学習に対する内発的意欲」を向上させるものであると確信している。

様々な困難な状況に直面しながらも、学校経営に日夜奮闘している校長先生方に心から敬意を表するものである。

引継ぎを終えて

飯村 俊幸（前 館小学校）

3月の退職を前に後任の校長先生への引継ぎ事項を整理していると、3年の間に引継ぎの内容が大きく変わっていることに気がしました。

私が校長として館小学校に赴任したのは平成23年4月でした。あの東日本大震災の発生した年です。館小学校は地震による被害は軽微なものでしたが、緊張感漂う校長室で引継ぎを受けました。

引継ぎは震災時の話から始まりました。児童や職員の被災状況や校舎等の施設への被害状況の説明がありました。児童の安全確保と避難所運営に奮闘した校長先生を始め教職員のチームワークにも感動しました。

もちろん、一般的な引継ぎの話もあったのですが、私の関心は、児童の安全確保はどのようにするのか、避難経路はどうなっているのか、保護者への連絡方法は、避難所開設となった場合の対応はと、地震が起きた時の対策にばかり向いてしまいました。話を伺っているうちに、児童や職員を守るだけでなく、避難してくる地域住民の安全も確保するという校長としての職責の重さを改めて痛感して、身の引き締まるような緊張感を覚えました。

赴任しても、通常の教育活動がすぐには始められない状態でした。それまでの教員生活での経験が校長としての判断に役に立たない場合もありましたが、校長会、特に近隣の校長先生方と職員室の雰囲気は何度も助けられて、過ごすことができました。

後任の校長先生への引継ぎでも、児童の安全確保は、重要な引継ぎ事項の一つでした。この3年の間に、防災教育や地域防災訓練、防災計画作成等、児童の防災や安全確保の新たな取組も始まりました。

また、学力向上、小・中連携による9年間を見通した教育活動、地域連携等の3年間の取組の一つ一つが引継ぎの柱となりました。

改めて見直してみると、引継ぎ事項を通して、学校が震災直後の動揺から穏やかな日常へ戻ったこと、同時に、学校への期待・要請が通常の教育活動の再開から教育活動の内容と質の向上へと大きく変化してきていることを感じました。

3 年前に前任の校長先生から多くの財産を引き継ぎました。今、後任の校長先生に、これを減らさずに引き継ぐことができていると願うのみです。

伝えること 受け継ぐこと ～教訓を地域と共有する取組～

渡部 力（前 東六番丁小学校）

退職後、三月になろうとしています。新聞等に、減災・防災教育に取り組む子どもたちの報道を見つけ、教育の力による復興への取組を目にしています。地域・関係機関との連携の下、様々な体験活動を通して大震災の教訓を学ぶ子どもたちに、当事者意識と困難や課題に立ち向かう力が身に付いてほしいと願っております。記事やニュースに触れるたび、校長先生や学校の気概を感じ、お茶の間から応援しています。

過日、知人の系譜を伺いました。足利尊氏から数えて27代目に当たるそうです。歴史に名を遺した大人物の流れをくむ方との会話は、武家社会を身近に感じるひと時になりました。およそ700年の歳月は、それぞれの時代を背景に、系図には見えない家訓や家法を積み重ね今日に伝えられてきたに違いありません。エピソードに、歴史の重みと人のつながりの強さを感じました。

東日本大震災後、取り上げられる歌があります。[契りきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山波越さじとは]。平安時代の大歌人、清原元輔（清少納言の父）の作です。下の句にある「末の松山」は、多賀城市にある小高い丘を指し、「波」は、869年の貞観地震の大津波とされています。永遠の約束を交わす絶対の象徴として、貞観地震の津波被害を免れた場所が登場しているのです。1000年の時を超えて語り掛けてくる言葉の力を感じます。

新潟地震発生から50年目となる6月16日、新潟では、大規模な防災訓練が行われました。新潟市立小針小学校で、東日本大震災で得た教訓をお伝えする機会がありました。頂戴したテーマの一つは、学校と地域連携の重要性です。

全国各地で、減災・防災教育が盛んに行われています。各地域・各学校で、子どもや保護者、地域の

方々と、東日本大震災から得た様々な教訓を共有する活動が展開されています。強靱なまちには、日常的な人々のつながりが必要不可欠であることもその一つです。

学校には、地域を求心する様々な取組があります。地域の教育力を生かした減災・防災教育は、地域の人々の心をつなぎ、系譜や歌に劣らぬ記憶として、永く人々の心に刻まれるに違いありません。

「子どもの命を預かっている」 ことを念頭に

鎌田 和男（前 将監中央小学校）

校長会の皆様には大変お世話になりました。特に、地区会での情報交換は、学校運営を行っていく際の参考になり、大変有意義なものとなりました。ありがとうございました。

さて、私は、4月から七北田公園を管理する都市緑化ホールに勤務しています。ホールでは、公園管理や園芸相談、園芸講座の開催、展示会など、いろいろな業務を行っています。中でも、市民に憩いの場を提供するために、安全で、しかもきれいで整備された公園にすることがとても大切だと思っています。

来園者に気持ちよく過ごしてもらうために、禁止行為がいくつか設定されています。草木の伐採・採取（タケノコ取り）やバーベキューの禁止などもその一例です。このことを園内放送で呼び掛けています。それでも、違法行為をやめない方には、直接出向いて注意を行ってきました。

安心・安全な公園管理の徹底を図るために、園内の巡視を毎日最低3回は行っています。1回の巡視に40分以上を掛けています。まさに、危機管理の毎日だと考えています。

6月初旬、テレビのニュースで小学6年児童が、今年度初めての水泳学習中に、水に沈んだ状態で発見され、意識不明の重体になっているということが報道されていました。

学校は、公園以上に、毎日が危機管理の連続です。校長として勤務していたとき、職員には、ことあるごとに、「我々は、子どもの教育を託されています。」

しかし、その前に、『保護者から子どもの命を預かっている』ことを常に忘れないでください。」と、言い続けてきました。さらに、学校で児童に何かあったときは、必ず保護者に連絡し、異常な状態のままに下校させることのないように徹底を図ってきました。

学校を取り巻く環境が、今後さらに厳しさを増していくことと思いますが、校長先生方には、心身ともに健康に留意され、未来を担う子どもたちのために、ますます御活躍されることを期待しています。

感 謝

菊池 健（前 市名坂小学校）

教職生活を終えて、3 か月が経とうとしています。37年間はあっという間の歳月でした。様々な出来事、子どもたち・人との出会い……。今は、感謝と同時にほっとしているというのが偽らざる心境です。

最後の3年間は震災からの復旧復興が至上命題でした。それは、子どもたちの教育環境を震災前にリセットすること、言葉を換えれば「日常の教育」を一刻も早く取り戻すことでした。震災直後に市名坂小学校の内示を受けた時、前校長からは「校舎も体育館も使えません。七北田小学校に間借りの話を進めています。」とのこと。これから何をどう進めていったらよいか、正式着任まで悶々とした1週間だったのを憶えています。

学校への正式着任前の4月1日午前中、学校施設課に伺い、校舎の早期点検をお願いしました。校舎は本当に使えないのか、どのくらいの間借り期間になるのか等、保護者、教職員等へ説明しなければと思ったからです。学校施設課のご配慮で修繕業者とすぐに点検していただき、修繕すれば何とか使用可能との結論に至り、多くの学校より2日遅れの始業式・入学式にこぎ付けました。その後も、体育館、校舎等の細かな修繕はありましたが、10月までにはハード面での復旧は果たせました。あとは子どもの心のケアの問題でした。市教委等の各種の調査からは、幸い大きな問題は見られませんでした。教職員

からも深刻な報告はありませんでした。これは、日頃から教職員が細心の注意を払いながら子どもの観察や心のケアに当たった成果だと思います。その面でも教職員には大変感謝しています。

校長はよく尋ねられます。「あなたの学校経営の柱は何ですか？」と。私はこう答えることにしています。「アカウンタビリティとインフォームドコンセントです。」と。アカウンタビリティはもちろん説明責任です。インフォームドコンセントを私は「十分な説明に基づく同意」と訳しています。児童にも保護者にも、そして教職員にも「出せる情報は出す。」「校長の考えをよく説明して同意し行動してもらう。」ことが学校経営には最も大切だと考えてきました。

最後に、これまで関わっていただいた皆様に改めて感謝いたします。

I さんのこと

遠藤 和彦（前 原町小学校）

以前勤務した岡田小学校の西門は、三叉路に面しており交通事故も多い場所である。I さんを見たのは、子どもたちの登校初日の早朝であった。出勤し、職員室から西門を見ると、年配の男性が一人で交通誘導を行っていた。教頭先生に聞くと、近所に住むI さんで、数年前から一人で子どもたちの安全誘導を行っているとのこと。急いで、西門に向かい、御挨拶と御礼を申し上げた。すごく気さくな方で、すぐにいろいろなことを語り合うことができた。また、優しい方で、登校してくる子どもたちとお互いに親しげな挨拶を交わし合っていた。

それから毎朝、挨拶を交わし、I さんは交通誘導、私は学区内巡視を行ってきた。年齢的にはだいぶ離れてはいるが、大変親しくしていただいた。しかしながら、用事があっても直接校長室のドアをノックすることはなく、職員室の教頭等に伝言を依頼して帰って行くのだった。理由は、「校長先生は学校のことで忙しいから。」とのこと。まさに、「知崇礼卑」そのもの。この校長初年度にすばらしい人物に出会い、改めてその大切さに気付かされた「交以道 接

以礼」は、次の年から岡田小学校経営方針の基本的な柱となった。

この I さんの人柄と熱意により、4 年間で交通誘導を行ってくれる方は次第に増えていった。

学校においても、I さんの存在は大きく、要請すればすぐに支援体制を整えてくれた。特に、東日本大震災後は、御自宅も大変だったのに、いろいろな面で尽力してくださった。避難住民が体育館へ移動した後の校舎清掃を、自らが声を掛けて集めた地域の方々と行ってくれたこと。子どもたちの心のケアにとうさぎ小屋を新築した際も、炎天下の中、自らが先頭に立って作業を行い、子どもたちが安全にうさぎと触れ合う小屋を作ってくれたこと。

I さんの功績は枚挙に暇がない。

震災直後の小さな集会所で行った卒業式で終始涙を流し続ける姿から想察できたのは、I さんの行動の源泉は私利私欲なく岡田の子どもたちのために力を尽くそうというところにあるということである。

今日もまた、人としての道と礼節を重んじ、子どもたちのために奔走していることでしょう。私も、境地を同じくして学校を訪問しようと思っている。

課題解決に向け

日下 正義（前 新田小学校）

37年の教職生活に終わりを告げ、早3か月が過ぎました。精神的なゆとりはできましたが、第二の職場で仕事を続けている今、思っていた以上に時間的なゆとりを感じる事がなく、毎日が忙しく過ぎていきます。仕事をしている以上、当たり前と言えば当たり前です。

さて、校長在職中には、本当にいろいろなことがあり日々新しい課題への取組の連続でした。その全てが学校運営に関わることなので、校長としての決断が必要なことでした。その決断をする際に、私が大切にしていたことが二つありました。

一つは、「正確な客観的事実」をしっかりと把握することです。もう一つは、「焦らず騒がない」ことです。学校の長たる校長がばたばたしていると、学校全体が浮き足立ち多くの雑音が入ってきます。何か

を決めなくてはいけない時、雑音は百害あって一利なしです。私は、事が重大であればあるほど、この二つのことを肝に銘じ決断してきました。

これからの学校は、ますます多くの課題を解決していくことが求められると思います。その時、校長先生方には、自分自身の考えでしっかりと「決断」していただければと思います。

最後になりますが、教職生活最後の年に、この仙台で開催された「第48回小学校学校行事研究全国大会宮城大会」に大会事務局長として大変貴重な体験をさせていただきました。その際、大会に参加していただいた仙台市はもとより全国の皆様から、大会に対するたくさんの賞賛の声と震災復興への励ましの言葉をいただいたことを報告するとともに感謝を申し上げ、まとめたいと思います。

皆様のますますの御活躍を祈念いたします。

「教育による復興の姿、 たゆまぬ歩み」を全国へ発信

堀越 清治（前 荒町小学校）

仙台市小学校長会が、針生弘会長を中心に小学校教育の充実発展を期して、子どもたちの明日への明るい展望、それを具現化する方策や校長会としての強固な組織体制を一堂で確認し、平成26年度のスタートを迎えられたことを心からお祝い申し上げます。

さて、大震災から4年目を迎えました。復旧復興が進む陰で、市内においても今なお仮設校舎や近隣の学校での教育活動を余儀なくされている子どもたちがいます。また、将来の生活の見通しが立てられない住民の方々もいることを考えれば、一日も早く復興を成し遂げなければなりません。

昨年11月、仙台市小学校長会は、これまでの多くの御支援に感謝の気持ちを込めて、20数年に一度しか巡ってこない指定都市小学校長会研究協議会を開催できるという、またとない好機をいただくことができました。21都市の小学校長会の代表者170名余りをお迎えし、盛大に開催できたことは、大きな喜びであり、鮮明な記憶として甦ります。

研究協議会、話題別情報交換会、シンポジウムを

改めて振り返りますと、私たち仙台市の取組が全国的に注目されていることや、他都市に比較しても引けをとらないどころか先駆的な立ち位置にいることを感じることができました。この土台にあるのは、これまでの歴代会長をはじめ諸先輩の校長が培ってきた歴史と伝統の上に立ち、私たち小学校長会の「力一つに、オール仙台」で取り組めるという強い組織力、「西の京都、東の仙台」といわれるモチベーションの高さ、会員一人一人の研修意識の強さにあります。

今年3月末、宮城教育大学との連携で作成していた震災実践事例集の第2集が完成し、各学校へ配付されました。各校長の学校経営、被災校6校の今、防災モデル校の取組など、この3年間のあゆみが詳しくまとめられており、読み応えがあります。

今年度も、東日本大震災に係る復興プロジェクトをはじめ、陸上記録会、七夕プロジェクトなど復興に向けた取組、さらには今後増加が予想される心のケアへの対応などを記録にまとめ、後世に伝えていくという一連の活動、その価値は、今後ますます重要性を高めていくものと考えています。

被災都市仙台の教育による復興の姿、たゆまぬ歩みを、今年度も全国に向かって発信していただきたいと願ってやみません。

たくさんの方に支えられて

玉淵 安夫（前 連坊小路小学校）

早いもので、新年度も3か月を過ぎ、学校では夏休みが話題に上っている頃ではないかと思えます。

在職中は、校長会の皆様に多大なる御支援・御協力を賜り、ほんとうにありがとうございました。先輩方の心強い一言一言に助けられ、同僚の皆さんの優れた実践を学ばせていただき、何とか8年間の校長職を全うできました。心より感謝申し上げます。

さて、私が教員になった時には、「学校と家庭は車の両輪」と言われ、その連携の大切さが叫ばれていました。初任地が山間の小さな学校だったせいもあり、保護者・地域との連携は当たり前のように行われておりました。私自身何も知らずに飛び込んだ教

育現場で、保護者の方からたくさんのことを教えていただき、温かく育てていただきました。

時代は昭和から平成に移り、社会は目が回る程急激に変化し、学校に求められるものや学校で対応しなければならないことが加速度的に増えてきました。そうすると、平らな舗装路をゆったりとドライブするようにはいきません。毎日が悪路、雪道、急カーブの連続です。安心して運転するには、4WDのたくましさ・安定感が求められます。学校経営で言えば、家庭・保護者との連携を基軸としながらも、積極的に地域や専門機関の力を活用する四輪駆動の経営が不可欠となってきました。私自身、地域の皆様に大きなお力添えを賜っていただきましたし、市教委始め、大学、諸機関の皆様に御助言・御指導いただき、幾多の難題を乗り越えることができました。学校と保護者という当事者同士の諍いで埒が明かないときに、地域や専門機関という第三の力が役に立ったこともありました。

学校には、これからもたくさんのことや難しいことが求められることでしょうし、最終的には校長が判断し、責任を取らなければなりません。日頃の開かれた学校づくりが大きな力となってくれることは間違いないと確信します。現場の校長先生方には、お身体とお心を大切にされ、一人で悩むことなく、学校を支えるたくさんの力をコーディネートするとともに、その大切さを若い教員にも継承し、自信を持って次代を担う子供を育む学校づくりに御尽力されますよう心より御祈念申し上げます。

皆様との出会いに感謝

下山 倉美（前 六郷小学校）

仙台市小学校長会の皆様には大変お世話になり、ありがとうございました。感謝申し上げます。37年間の教職生活でしたが、かわいい子どもたちや素晴らしい同僚との出会い、そして頼もしい先輩方との出会いがありました。

決断するのに迷った時、保護者等への対応で困った時は迷わず先輩の校長先生に相談させていただきました。すると、これまでの経験談を話していただ

いたり、的確なアドバイスをいただいたりしました。

その都度、「なるほど……」とただただ感心するとともに、いつか自分もそのようにありたいと強く思いながら努めてきましたが……。

平成26年3月31日。教職を全うできたことは多くの先生方との出会いがあったからです。先生方との出会いに心から感謝です。

ところで、校長として忘れられない二つの出来事。それは、未曾有と言われた東日本大震災時の対応と政令指定都市仙台大会の開催です。

大震災時、情報がなかなか入らず、目の前にいる子どもたちの安全な避難と保護者への確実な引渡し、そして避難してきた方々への対応。さらに、授業再開に向けての準備と併せて一時避難している子どもたちの所在の確認などで不安な時、近隣の校長先生方がとても心強く、助けていただき事故なく乗り切ることができました。校長先生方との出会いに感謝です。

二つ目は政令指定都市仙台大会です。仙台市に多くの先生方をお迎えし、「オール仙台」を合い言葉に、思いを一つにして取り組んだ大会でした。皆さんにおもてなしの心が通じ、笑顔で帰られたのが印象的でした。特に、歓迎レセプションでは、被災地の「六郷すずめ隊」の踊りが披露されました。晴れ晴れとした表情で、しかも勢いのある踊りに会場内の皆さんからは賞賛の拍手をいただきました。まさにその時は、六郷に勤務する一人として私もすずめ隊の皆さんと同じように、熱いものが込み上げてくるのを感じました。とても感激したひとときでした。これも六郷の皆様との出会いに感謝です。

最後になりましたが、これまでの御指導と御支援に重ねて感謝を申し上げますとともに、仙台市小学校長会のますますの御発展と、校長先生方の御活躍を心からお祈りいたします。

金次郎像と風化

石野 勝美（前 長町小学校）

5月最後の土曜日、退職時に学校から持ち帰った荷物の整理をしました。その荷物の中に、校門近く

にある二宮金次郎像の写真がありました。大地震により両足首が「骨折」し、転落の危険があったため一時的に撤去したのですが、その様子を撮ったものです。その写真を見ていて、「像が修復されるまで…」と校長室の中に掲示していたことを思い出しました。それに誘われて、震災後の様々な記憶も蘇ってきました。

そういえば、退職してからは、震災後の出来事や学校での復旧・復興に向けた取組は、漠とした記憶になっていました。震災復興や復興教育に関する新聞記事やテレビのニュースへの関心も薄れていました。よく言われる「震災の風化」とか「震災体験の風化」などということは、私には無縁のことと確信していましたが、退職とともに「風化」が始まっていたことに気付きました。

振り返れば、震災後の3年間は、職員と共に大震災の教訓を踏まえた復興教育や防災教育に取り組む日々でした。その一つに、毎年3月11日（又はその前後の日）に設定する「防災学習の日」があります。年に一度は、震災の事実と子どもたちがあの時体験したことや思い感じたことを思い出す機会を持つと、震災の記憶がない子どもたちや体験しなかった子どもたちには、それを伝える機会にしようというものです。これは、子どもたちの「震災の風化」を防ぐことをねらったものですが、校長としては、教職員の意識の風化防止を願ったものでもありました。

時が経つと、誰にでも「風化」が忍び寄ると思います。教職員に風化が進むと、震災体験を基に積み重ねてきた教育活動が形骸化したり、いつの間にか途絶えたりすることが予想されます。これからは、震災後取り組んできた教育活動を見直し充実させることに加え、教職員の意識の風化を予防すること、また、次の世代の教職員にこれまでの取組の基となった熱い思いを伝えることも大切になってくるのかなあ…。荷物整理の手を休め、金次郎像の写真を見ながら、こんなことを思いました。

ちなみに、金次郎像の写真は、6月からダイアリーのポケットの中で、私の風化を監視しています。



きれいごとをこそ

佐々木 拓哉（前 中田小学校）

震災後の避難所における、規律正しい日本人の行動について、世界中から賞賛の声が上がったことは周知のとおりである。が、彼らがどこでどのようにしてあの行動様式や公德心を身に付けたのか、についてまで論及した話を、寡聞にして私は知らない。

日本が誇るべきあの姿は、学校教育の果実であると私は信じている。親や家人による何らかの教育的影響があったとしても、その源は学校教育にある。思想は遺伝しない。マスコミの教育効果は確かに絶大ではあるが、そのベクトルは逆方向を指している場合がほとんどである。外部から、学校を評価する声が上がってくればとてもうれしいのだが、残念ながらそのようにはならなかったのです、私は自分で自分たちの画をほめることにし、機会をとらえて職員に話をした。とかくマスコミの批判にさらされるばかりの学校や教師たちである。自信と誇りをもって、生き生きとして子どもたちの前に立ってほしいと願ってのことである。

教頭時代、子供同士が加害・被害関係となる事故があった。補償金額の具体的な数字がテーブルに上り出した頃、どちらも同じく本校の子供であり、双方の幸せを願うというような趣旨の話を私がした時、同席していた加害者側の祖父に「きれいごとを言うな!」と逆ギレされたことがあった。「きれいごとを教えるのが学校の仕事です」と、即座に返せなかったことを、私はその後幾度も悔やんだものである。

私利私欲の拡大と、一方では他者の幸福を願い、平和な世界を求める理想との、両極の引っ張り合いの中で、人間は振り子のように迷いながら生きている。そのバランスを大きく欠いた現代社会の歪み。それは、あの原発事故にもつながってしまった。

多くの人が宗教を持たない日本人に、理想やきれいごとを教えるところは学校しかない。このことを強く自覚し、日本人をもっともっと理想の極に引き戻すことこそが、今の学校の果たすべき役割であると信じている。

日々世界に目を向け、国を見て、職員に大きな方

向を指し示してやるのが校長の仕事。現役校長先生方のますますの御奮闘を御期待申し上げます。

車窓から、街を歩いていると……

齋藤 英次（前 東長町小学校）

バスの窓から見る景色の色は茶色が多く殺風景だと思っていたら、やがて萌黄色が多くなり、緑色に変わっていった。

また、（ここにはこんな木が生えていたんだ。）（こんな家があったんだ。）と、感じるが多かった。

退職した翌日からバス通勤が変わった。視点が高くなり、景色がゆっくり流れ、そしてじっくりと眺めることにより、新たな発見の日々が続いている。

勤務先も市内中心部となり、マイカーを運転していた時とは全く違った景色が見えることに驚きを感じた春だった。

一番町や国分町の街も例外ではなく、日中に見る街並みや建物。ビルの中の会社や店舗。いつの間にか店が変わっていたり、改装中の店舗があったり…。

朝は、急ぎ足で会社に向かうサラリーマンやOL。早朝から夜の街の後始末をする人たち。そして、朝帰りの飲食店従業員も…。

夕方には家路につく人々、夜の飲食店で働き始める人。夜の繁華街が顔を覗かせ始める中を帰宅する。

18年ぶりの市内中心部での勤務。一番町や国分町を歩いて縦断する毎日。あえて裏通りを通ったりすると、いまだに驚きや発見がある。それを、通勤の楽しみにしている。

教員生活では、様々な角度や視点から子どもたちのことを考えて実践してきたつもりだった。が、退職してみると、果たしてそうだったのかと疑問が残らない訳でもない。今、教員と全く関係のない仕事をしていると、世の中を知らなかったように思えてならない。

学校は独特の社会で、良くも悪くも一般社会とは大きな隔たりがあるとも言われる。一般常識や組織の一員としての自覚の欠如など、他の社会より必要とされている部分がいつの間にか欠落していたりす

る。

長年、教員という独特の社会にいと、見えなくなるものがあったり、失うものが大きくなったりする恐れがある。そうならないように気を付けなければ……。

でも、退職してしまった今は、『後悔先に立たず』。退職の準備は、一般社会人になることへの準備からか……。

みなさん、お世話になりました。ありがとうございました。

ゴール

飯坂 新（前 大野田小学校）

「ゴール」。それは、言い方を換えれば事の終焉。感覚的に表現するなら、長い階段を上り詰めた後の満足感と言ってもいいでしょう。

昭和のゴール。つまり昭和の終焉から四半世紀、私は教員として昭和の倍以上の時間を平成で過ごし、そしてゴールを迎えました。過去となってしまった昭和ですが、その時代は教員として駆け出しの私に貴重な経験を積ませ、職場の楽しさというものも味わわせ、私自身を育ててくれた大切な時代もあります。でも、昭和の頃に諸先輩から受け継ぎ培ってきたあの輝かしい教員としての矜持を、平成の時代につなぐことができたのであろうかと振り返ると忸怩たる思いに駆り立てられてしまいます。

だからかもしれません。4月からは今まで溜まった頭の中にある圧力を一気にガス抜きし、リラックスした時間を過ごして今後の人生のいい発想をしたいと願いながらも、今はまだその状況が訪れることはありません。ましてや、「満足感」に浸り、静かに「余生」を過ごすという隠居生活などほど遠い世界であることは言うまでもありません。

ゴール＝終焉＝余生。「ゴール」は整理するとこんな等式になるのでしょうか。言葉遊びをするなら「余生」は「予生」「与生」「預生」「代生」とも書けます。勝手に解釈するのなら「予生」は、今後の生き様はすでに決まっているんだから、おおらかに生きなさいとでも。「与生」は、あなたにあげた生き方なんだから好きに生きなさいと。「預生」は、勝手に生き方は決められません。預けられた命に対しこちらが指図しますからその時を待ちなさいと。「代生」は、あなたの生き方は自ら管理すべきですと解釈しましょうか。小林秀雄氏は『ぼくは後ろを振り向かない。人生に対しても書いたものに対しても』と言いましたが、私もいかなる「余生」をも自分なりに咀嚼し、氏の言う後ろを振り向くことのない境地を味わいたいものと願っています。

ともあれ、校長会では6年間大変お世話になりました。その間、幾度となく辛苦も味わい痼癪も起こしたくもありましたが、校長会としてのつながりがあったからこそ乗り越えられたと思っています。苦にあっても苦にせず、「かんしゃく」も「く」の字をとればただ感謝。全てにひたすら感謝、感謝です。

編集後記

震災から3年5か月が経過しました。復興に向けて着実にその歩を進めてきた仙台。私たち校長は、教育の力で復興を目指すという合い言葉の下、自校の特色を生かしながら地域と連携し様々な取組を継続してきました。

仙台市教育振興基本計画が示す、「未来を担う子どもたちに必要な力の育成」に取り組み始めている学校も数多くあります。「未来を切り開いていく力の育成」に様々な方法で挑戦している実践を知っていただくことで、活動や復興に向けた新たな取組を共有する一助になれば幸いです。

最後になりましたが、御多用の中、玉稿を賜りました校長先生方、復興を担う教育を力強く推進され、かつ本号に心強い応援メッセージをお寄せくださいました退職校長先生方に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

（85号担当チーフ 柴 記）

編集担当者：柴 有司（鶴谷小） 高橋 淳（岡田小）
高橋 克仁（四郎丸小） 高橋 一浩（高森小）